尾形流四大家画譜

To Mr. C. L. Freer.

Bunshichi Kobayashi.

December 10th 1901.

尾形流四大家画譜

尾形光琳傳

尾形光琳初名は惟富、後方祝又道崇と改む、光琳は其別號、又寂明、澗聲、伊亮、靑靑堂、長野堂等の號あり、澹齋宗謙（主馬）の子、幼名市之丞、其家造染(そめもの)を業とし、俗に鴈金屋藤重郎と呼ふ、又勝六と稱す、本國は豐後、緒方三郎惟義（平家物語に出つ）の裔なり、故に其氏或は緒方に作る、高祖伊春、（新三郎）足利將軍義昭に仕へ、食祿五千石、義昭淪亡の後京師に住す、其子を道柏と曰ふ、道柏の子宗伯、宗伯の子宗謙、並に東福門院（源ノ和子、後水尾天皇の中宮）、の御服所たり、宗謙本阿彌光悅の書法を學ひ其室に入る、光琳初め狩野安信（一說常信）に從ひて畫法を受け、野野村宗達（伊年）の風を慕ひ、又古土佐の筆意を模し、研鑽措かす、後深く光悅を景慕し、書畫髹漆皆法を此に取り、終に新意を出して一世の名匠となり、法橋に叙す、其畫く所花卉翎毛山水人物、悉く金銀泥を用ゐて設色するに、穠艶妍媚ならさるはなく、而も用筆簡淡にして一種の神韻あり、蓋し光悅の規摹より生し、雜ふるに諸家の專長を以てす、又茶道を千ノ宗佐に受けて、漆器の描金に妙を得、硯箱茶器の製作に巧みなり、其印籠を造るや、形を光悅の意匠に採り、己の描金法を用ひ、螺鈿を以て地と爲し、金粉之を塗り、裏面も亦皆金地にして曾て梨地を設けす、大に世人に賞譽せらる、光琳甞て江戶に來寓し、享保元年六月二日京師に卒す、年五十六、（一曰六十二）小川頭の妙顯寺中本行院に葬る、弟（一說兄）乾山も亦畫を善くし、陶器を以て世に鳴る、光琳造染の家に生長し、父祖以來、宮禁の御服を調進す、東福門院坤儀の尊を以て、關東の崇奉を受けらる、其服御釆飾盛美を極めしや知るへし、光琳耳目之に慣る、後來意匠圖案に富める、其淵源蓋し此に存す、加ふるに茶道の嗜好を以てし、雅致逸韻を養ひ、華實兼備し、以て其天賦の才技を成就す、是れ尋常畫家漆工の企及ふ可らさる所以にして、後世工藝家の大宗師となり、名譽を中外に播(はどこ)すも亦宜ならすや、

明治三十四年四月

文學博士 重野安繹撰

本阿彌光悦傳

本阿彌光悦初め次郎三郎といふ次郎左衛門入道光二か長男なり弘治三年に生れ寛永十四年二月三日に沒す八十一歳老後洛北鷹ヶ峯に隱居し太虛庵又徳友齋といふ

沒後一字を營て光悦寺といへり其邊を光悦町といへり

光二は文明の頃京都の所司代たりし多賀豊後守中原高忠の二男片岡次太夫か長子にて次郎三郎といふ本阿彌七世光心にはしめ男子なかりしかは次太夫か妻は五世妙壽か妹なれはやかて次郎三郎を養ひて子とし次郎左衛門と其職を嗣せしなり後に光心の實子光刹出生せしかは光二自ら別家を立て本家の名跡をは光刹にそつかせけるこれ本阿彌の家を別てるはしめなりそも〳〵本阿彌か始祖妙本は菅家五條高長卿（高長卿は五條家の始祖にして高辻爲長卿の二子なり）老年の庶子にして（長經卿の三子となり季長卿の弟と稱す五條家系譜又如此）刀劍鑒識の業をたしみしより初て儒家を出て武辨を事とし等持院將軍に隨從し刀劍の奉行として刀劍古今鍛冶の巧拙利鈍を識別し其世系をも授記しける其子本妙其子妙大其子妙秀其子妙壽皆其事を嗣し妙壽に男子なかりしかは門下に足利六世之將軍普廣院殿昵近之士松田右衛門三郎淸信とて鑒刀を好み其業にすくれたる者ありしを長女にめあはせて嗣子とすこれそ六世本光とて職事拔羣なるを以て本阿彌中興と稱せらる嘉吉元年夏六月普廣院殿赤松滿祐か館に成せられへき朝に粟田口國吉の小脇差の鞘口をかためさせらるゝに三度まて鞘はしりけるを其業の拙なるそと咎められて當座に禁錮せられけるされとこれは其日彼館にて變事あるへき兆にてそありける故に後に此國吉の脇差を拔國吉と稱して名物にそなりにける本光しはし禁錮せられける間日親上人に同舍にあり約して門徒となる（今に至る迄本阿彌一家皆其宗派に歸依するはこれによれり）本光の子は則光心なり

或說に本阿彌は足利三世鹿苑院將軍家のいまた妙年にて在し頃執事細川賴之當時の士風を矯むとて圓頂にして士の服を着し何阿彌某何阿と唱へて陪侍せしめこれを童坊倭坊といひしそれらか子孫なりといへれと妙本か沒せしは等持院將軍治職の間文和四年四月三日なれは鹿苑院將軍の嗣職ありし應安元年よりは十三年の前にして同朋といふものゝ起源より先なる事明らけし

そのかみ士人の剃髮せしにも何阿彌陀佛某阿彌陀佛といへりしを下略して妙本といひ兒孫は又その上を省きて苗氏とし本阿彌某と稱せしなり九世光德慶長のはしめ豊公の命によりて始て極折紙の規則を成し其頃豊公より賜りし銅印（極折紙札の裏面に捺す）今に傳へて宗家にあり

光二か光心の實子光刹に家を讓り嗣せておのれは別家せし事を光刹感し思ひて其長女を光二か子なる光悦にめあはせ光悦か妹をこひて己か子の光德にそめあはせける（光悦若くして其妻を失ひ後再ひ娶らさりしはこのゆゑになるへし）光悦は其職はいふもさらなり書畫茶陶の業にさへ長して且は光德か子光室かうしろみせることとくありけるにそ世には光悦を宗家歷代の内なりといへるにそ（光德か極折紙を光悦か書るなといへるは光德か光悦に學ひて其書體よく似たるを以てなり）光二は總見院右府公にも親しませたまひまた東照神君のいまた幼くて今川義元か許に在せしころより親しくまみゑ奉りける高德公越の府中に在せし頃より食知を給り其子光悦其子光瑳に至りて二百石をそ給りけるさるゆゑに光悦か元和のはしめ（大阪役後西京にてまみゑ奉りける頃といふ）東照宮より食邑二百石を給はるへき命ありける時うちには父か給はりし食知の故を以ても外にはその年老て江戶駿河に參り仕ふる事あたはさるを以て辭ひ奉りけるなり光瑳は（光悦子なけれは其徒弟を養て子とせしなり）父光悦と同年（寬永十四年七月五日六十歳にてありし）に沒し其子光甫は（又書畫茶陶を能し職業最當時の冠たり空中齋と號す茶は小堀遠州侯に學ひ甫の一字を授けらる天和四年七月二十四日沒す）微妙公殊に寵したまひて常に親しく仕ひ奉り食祿百石を加增し給り年老隱居せしに又現米五十石をそ給りける光甫か長男光傳は次郎三郎といひて年若き時より同しく親しく召仕はせたまひて父の食知三百石を給ひ其弟（光甫か五男）光山か大學といひていまた幼きをもいと辱き仰ことありて松堂公の御時に新たに召出させ百五十石をそ給りけるされは光悦か子孫といふはこの光傳か八世の孫今の之廉（俊篁）と光山か六世の孫なるおのれ長識にてありける

右は明治二年己巳の春金谷の御館に伺候せしに成瀨正居氏をもて本阿彌光悦かことをたつねさせたまひしをり正居氏の需によりて記憶せるまゝに記せしなれはおもひあやまれることもありて投記なし置むとおもひつゝ且私事しけくしてしらすしらす年をへていまは年老病ひをさへ出たれはいよ〳〵そのよしなきをなけくのみにこそあれ

同し十あまりとせの夏のすゑに

長識追記

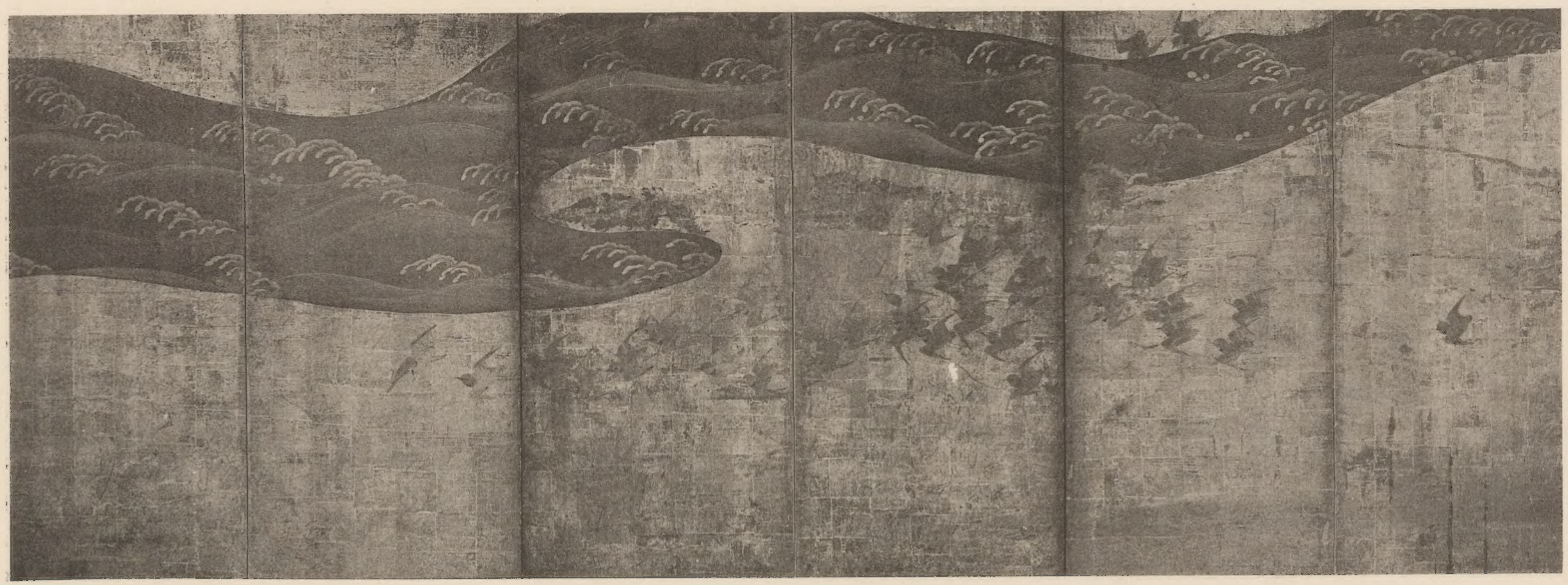




宗達



光琳



悦　光



宗達







光琳



光琳







拙　宗



琳　光

Now in Metropolitan Museum N.Y.



光琳



光琳



光琳



光琳

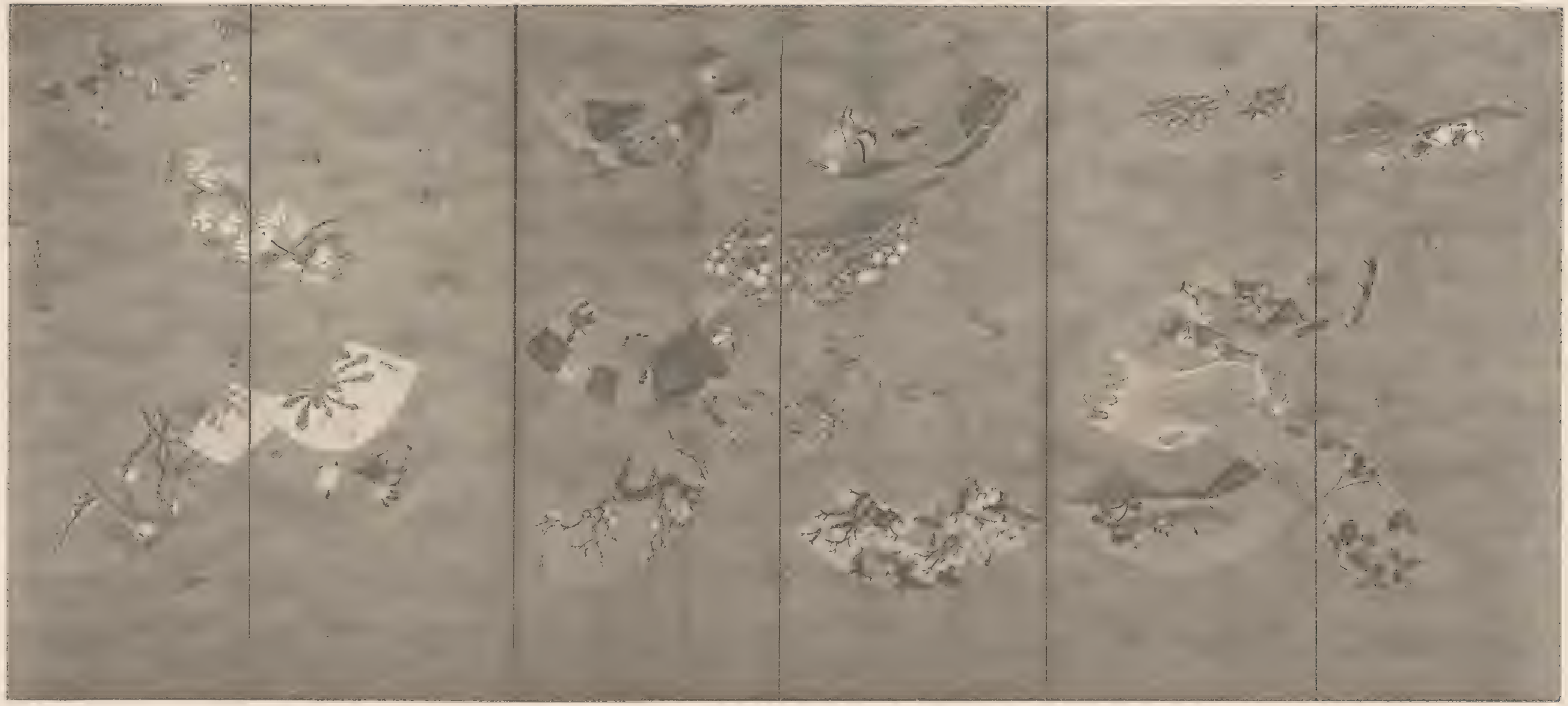


光琳



光琳

光　琳





光琳



乾山



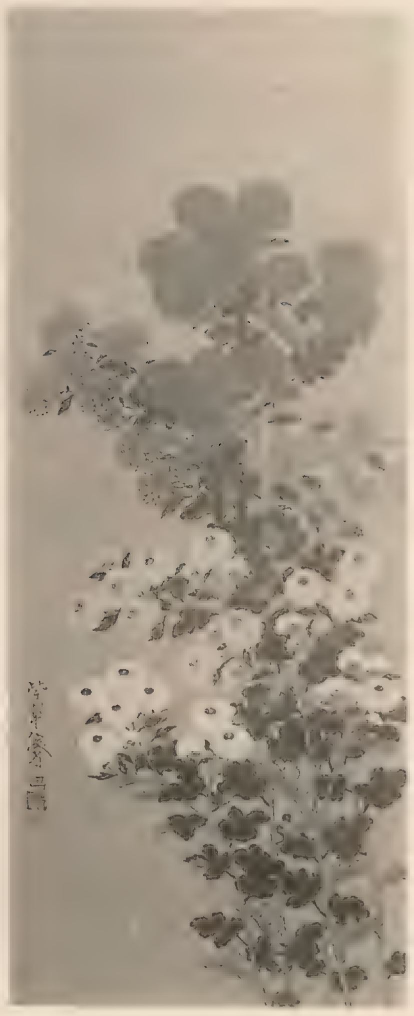
乾山



乾山



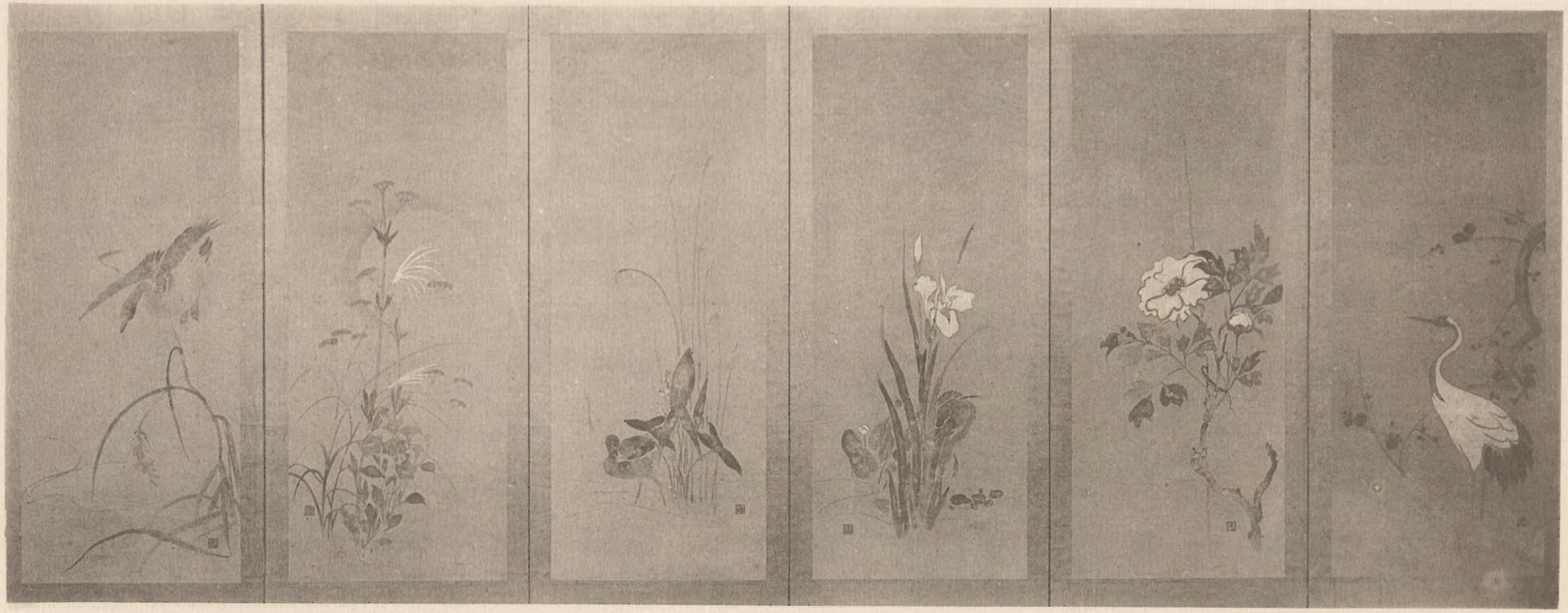
乾山




乾山



山　樂



山　乾

2147

明治三十四年九月二十日印刷
明治三十四年九月三十日發行

東京市淺草區駒形町七番地

編輯發行
兼印刷者　小林文七